# 02 日本語学校卒業生インタビュー

## 留学生から公立大学の学長に

**アハメド・シャハリアルさん**（出身国:バングラデシュ）

1966年生まれ。バングラデシュ出身。
1988年に来日し、89年にカイ日本語スクールを卒業。拓殖大学工学部電子工学科を経て、2000年東京電機大学大学院にて博士号（工学）取得。01年4月東京電機大学フロンティア共同研究センター専任講師に。その後、新潟産業大学経済学部助教授、同大学産業システム学部助教授、さらに開学直後の沖縄科学技術大学院大学に移り、技術移転セクション プルーフ・オブ・コンセプトプログラムマネージャー、技術開発イノベーションセンター ディベロップメンタル・リサーチ・スペシャリストを歴任。
高い能力を認められ、21年4月に新潟県三条市に開学予定の三条市立大学（仮称）学長に53歳（当時）の若さで抜擢された。

※プロフィールは2020年3月時点のものです。

バングラデシュから、エンジニアになることを目指して30年前に来日した元・留学生、アハメド・シャハリアルさん。日本語学校で日本語を学び、大学、大学院に進学。研究者として高い成果を収め、教育者としても多くの後進を導いてきたその経歴と経験を買われ、来春、新潟県三条市に開校する三条市立大学の学長に抜擢された。日本に来るきっかけから、現在、どのようなビジョンと思いを持って大学設立の準備に取り組んでいるのかということまで、元留学生ならではの視点も含めてお聞きした。

■聞き手：山本 弘子（カイ日本語スクール代表）　■執筆：青山 美佳　■撮影：白石 永

### 日本語を学ぼうと思ったきっかけは?

山本弘子（以下、山本）：今日も大学の設置準備で、文科省で打ち合わせだったそうですね。お忙しい中、ありがとうございます。
アハメド・シャハリアルさん（以下、アハメド）：はい、「ものづくり」を専門とする市立の大学なんです。ここのところ、毎週のように東京に来ています（笑）。
山本：大学のことは後でお聞きするとして、まずは日本で日本語を学ぼうと思ったきっかけからお聞きできますか。
アハメド：小学生の頃、バングラデシュ、当時は東パキスタンでしたが、ガンジス川のほとりにある発電所で父が働いていました。同じ敷地内に日本の新しい発電所が造られることになり、大勢の日本人が来ていました。発電所が立ち上げとなり、父はコントロール室で、機械がたくさんある前に座り、キャスター付きのイスを足で蹴りながら、機械の間を行き来していました。さらに、その父の後ろに、エキスパートの日本人が腕組みをして立っていて、口数は少ないのですが、いろんな情報が集まってくるのを見ながら的確な指示をしていて、その姿がものすごく格好良く見えたんです。自分もエンジニアになりたい、そのためには日本で学びたいと思いました。子供の頃に見た、この光景は少なからず影響があったと思います。
山本：シャハリアルさんは国費ではなく、私費留学生でしたね。
アハメド：はい、30年前はまだバングラデシュからの留学では学部レベルでの奨学金はありませんでした。金銭的にもかなりのチャレンジではあったのですが、自分は日本の大学で学ぶという強い意志があったので、バングラデシュの大学を受験さえしてないんです。
山本：日本に来て最初はどうでしたか。
アハメド：最初の3カ月は日本語の上達が遅く辛かったです。日本語が覚えられず、周囲の会話も雑音にしか聞こえませんでした。でも、その後は、先生や周りのサポートがあって伸びたように思います。日本語学校では毎日が楽しくて、欠席するのはもったいないと思ってました。クラスにはいろんな国の人がいて、まさにダイバーシティ。日本でこれだけ多くの国々からの人に出会えるとは想像していませんでした。

## 日本語の勉強で苦労したことは?

山本：日本語の勉強で一番苦労したことは、どんなことですか。
アハメド：うーん、最初は苦労しましたけど、大学入学の頃にはもう会話は普通にしていましたし、大学で日本人の友達とのコミュニケーションに困ることはありませんでした。だから、あまり勉強したという意識がないんです(笑)。日本語能力試験も来日した年の12月に4級(当時)を受けましたが、それ以来、受けていません。私は日本語の勉強の目的を能力試験の何級合格とかいうことにフォーカスしていなくて、もっと大きなことを目指していたので、テストの点数がよくなくても、くよくよしたりしませんでした。今は日本の新聞もすらすら読めるのですが、新聞を読むために勉強したというより、もっと大きなことを勉強しているうちに、いつの間にか読めるようになっていたという感じです。今回、自分が学長になり、留学生を受け入れる側になるわけですが、能力試験合格のためにということではなく、もっと網羅的に大きな目標を持って学べるような学校にしたい。能力試験も、いつの間にか力がついていて受けたら受かったというのが幸せじゃないですか。
山本：そうなったら理想的ですよね。大学に進学して専門の勉強に入ってからはどうでしたか。
アハメド：そもそも、大学は自分で勉強するのが基本なのに対して、バングラデシュでは勉強はさせられるものでした。それが、日本語学校で、自分で勉強し、わからないことがあれば尋ねることを覚え、勉強に対する姿勢が変わったのが専門での学びに役立ちました。大学に入ってからは、128人のうち外国人は私1人だったのですが、さらに尋ねられる先生が周りに増えて、周りの人には本当に助けてもらいながら、研究者としての土台を身につけていけたのだと思います。

## 研究者の道に、そして学長として新大学設立のビジョンは?

山本：大学を卒業したら国に帰ることも考えていたそうですが、大学院に進み、さらに博士課程に進んで研究者の道に入られました。それはどうしてですか。
アハメド：大学3年のときに研究室に入って人工心臓の弁の研究に関わることになりました。バングラデシュに出向している日本企業から、大学を卒業したらうちに来ないかという誘いもあったのですが、研究が面白くなったことと、いろんな先生や周りの人との出会いに恵まれたこともあって、東京電機大学の大学院に進むことになりました。
山本：大学院では人工心臓に関する研究で、論文賞を受賞しましたよね。
アハメド：はい、1つの血球が人工心臓に入って出ていくまで、血球にどのような圧力がかかるのかという研究で、国際人工臓器学会で発表したところ、他にない研究だったようで、いきなり賞をいただきました。さらに、その分析結果をアメリカ人工臓器学会で発表したら、今後の人工臓器研究の発展に寄与する研究であるという評価を得て別の賞をいただきました。ただ、院の1年目は成果が出なくて精神的にまいった時期もあったんですよ。
山本：でも、それを乗り越えて、高い研究成果と評価も得て、その後、新潟産業大学での新しい学部の立ち上げに関わることになったんですよね。その後、さらにあの沖縄科学技術大学院大学(OIST)に移って最先端の研究にも携わり、再び新潟に戻って、今度は三条市立大学の立ち上げに学長として関わることになりました。それぞれの大学で、シャハリアルさんに期待された役割は異なると思うのですが、どのようなビジョンや抱負を持って取り組まれたのですか。


創造性豊かなテクノロジストを創出する

三条市立大学(仮称)

(設置認可申請中／2021年4月開学予定)

- 名称　三条市立大学(仮称) Sanjo City University
- 開学年度　2021年度(予定)
- 学部・学科　工学部 技術・経営工学科
- 1学年定員　80名
- 学校種　公立4年制大学
- 整備・運営　市が施設を整備、公立大学法人が運営
- 場所　新潟県三条市須頃地区
- アクセス　燕三条駅(JR東日本 上越新幹線・弥彦線)より徒歩約10分

完成予想図

【お問い合わせ】
三条市 総務部 高等教育機関設置推進室
TEL:0256-34-5637(直通)　FAX:0256-36-2135
E-mail:koutoukyouiku@city.sanjo.niigata.jp

# 02 日本語学校卒業生インタビュー

アハメド：OISTでは、沖縄の持続的発展に貢献できるものを見つけ出して商業的価値を付け、地元に還流させていくのが私に課せられたミッションでした。理学分野にはアイディアや知的財産はたくさんあるのですが、そこに技術をプラスしなければ商業的、実用的価値は生まれません。商業的価値があるものとそうでないものを見分けることができるようになったのは、新潟産業大学での経験が役立ちました。いくら学術的に価値が高くても、地元のおばちゃんに「それ、明日の私の人生に役立つの?」と聞かれて答えられなければ商業的価値はないといっていい。東京にある大学で、朝、研究室に行ってデータとって論文を書くというだけの生活だったら気付けなかったと思いますね。

山本：なるほど。都市部ではなく、新潟と沖縄という地方にある大学ならではの経験が大きかったのですね。

アハメド：はい。日本では、大学設立にあたり、都市部も地方も同じ基準で審査されますが、本来は役割が違うはずです。「人をつくる」のは同じですが、地方ではその役割を守りつつ、地域の魅力やリソースを取り出せるかどうかが鍵になります。そのためには地域の人や企業の協力が必要です。協力といっても「大学に言われたから協力する」のではなく、「企業が自分たちのために大学に協力している」という考えにならなければ、本当の意味で地域に密着した大学になりません。これまでの大学は、キャンパス内で研究と教育が完結していましたが、大学は単独では存在しません。我々が作ろうとしている大学は、キャンパスの外にいる実務系の人たちとの融合を目指しています。私には研究経験、教育経験、それに実務経験もあるので、そこに私が関わる意義があると考えています。成功すれば、唯一無二の大学になりますし、地方大学のモデルにもなると思います。

## 留学生を受け入れに関して日本に望むこと、後輩の留学生に伝えたいこと

山本：日本はここにきて、外国人の受け入れに大きく舵を切ったわけですが、元留学生として、また大学で留学生を受け入れる立場として、日本に望むことはどんなことですか。

アハメド：日本は、教育インフラは世界トップレベルです。しかし、それが100%活かされていない。アジアで最初に先進国になった国ですから、アジアの人材育成や次世代育成のためにもっとやれることがあると思います。例えば、人口が減って定員に空きが出た大学などで留学生を受け入れ、教育して国に返すという貢献も考えられるでしょう。ただ、そこで足りないのは、宗教や文化の違いなども含めたお互いの理解です。そこにまず橋を架けなければならないと思います。そして、最初に橋を架けるのは日本だと思いますが、まだ心の準備が足りないのが現状です。三条市立大学でも、留学生の受け入れを期待されているのですが、そんなに簡単ではない。新潟もそうですが、日本の地方にはまだ古い考え方が残っていて、そこに土足でいきなり外国人留学生が来ても難しい。学生寮をただ造ってもダメです。地元の方から「うちに下宿していいよ」と言ってもらえるぐらいまでの準備をしてから留学生の受け入れは始めたいと思っています。リスクは最小限に減らしてからやればきっと成功します。

山本：後輩の留学生、日本語学校や専門学校、大学の先生に何か伝えたいことはありますか。

アハメド：自分が日本語学校で過ごした生活を振り返って思うのは、最初にも言いましたが、大きくビジョンを描いたほうがいいということです。当面の目標は大学入試や就職試験に合格することかもしれませんが、局所的にターゲットを絞ると、大きなものを見逃すことがあると思います。だから、日本語学校や専門学校の先生、大学の先生は、いい意味で「無責任」に、留学生に大きな夢を見させてほしいと思います。それを実現できるかどうかは、留学生本人の問題です。それと、先生には、日本語を教えるのではなくて、「日本の教育」をしてほしい。日本人が嫌うもの、好むもの、どうしたら日本の社会になじめるか、なぜなじむ必要があるのかといったことを感じ取れるような教育です。留学生も、知恵はあるしハングリーさも持っているので、それを教えてくれたらあとは自分で学びますし、それがわかれば日本語はあとからついてくると思います。自分の人生を考えても、最初から今の場所が見えていたわけではなくて、積み上げ式で、道を歩いていくと次の道が見えて、そこで人との出会いがあって、気づくと今、ここに立っているという感じです。

山本：歩いていくとだんだん景色が見えてくる。最初から見えていたわけではないのですね。

アハメド：そうですね。その時、その時、置かれたところで一生懸命やることが大切ですね。自分の経験からも言えますが、日本人は一生懸命やる人が好きです。一生懸命やる姿を見ると人は応援してくれます。これはこれから日本にやってくる留学生に伝えたいですね。

山本：今日は元留学生ならではの視点と、その後の日本でさまざまな経験を積まれたからこそ語れる貴重なお話をありがとうございました。開学準備で忙しいことと思いますが、健康に気をつけて頑張ってください。私たちも応援しています。